

かなり緩やかな愛の前進

I 粉挽き小屋のジャンヌ

ぼくが軍務についていた地方では、サロニカよりさらに遠くの地だったが、窓や戸はすべて西を向いていた。そのため夕方には陽の光がどこの家にも射し込んだので、「夕日ほどには誇り高くない」という表現があった。ところで、このぼくの部屋の窓もまた西を向いている。それであの地方を思い出したのだ。しかし今宵はこの強風のせいで塵の舞いがひどく、その窓を閉めざるをえない。

熱病の多いこの地方で進軍と戦闘がしばらく続き、疲れた。とはいえ、やっとヴェルマンフロワで二、三週間休むことになり、古ぼけた粉挽き小屋の袖に寝泊りしているところだ。戸口の前に座って豌豆か隠元を瓶に詰めているあの三、四人の娘たちとお喋りをして楽しむだけの高揚感は、悲しいかな、消え失せている。いったい、ぼくのことを彼女たちはどう思っているのだろうか。

ルナール親父はこんなことを言うのだった。「マルティニークにいたのさ、わしゃ。危険な所で、三、四人してでなければ決して出かけはしなかった。それに、尻尾が赤い猿もいて、夜になると出て

くるのさ。昼間は木の上で寝ているがね。それで、もし人がその木の根元に座ると、奴は目を覚ます。そしてまず、その人の頭の上に木の葉を落とす。だが、木の葉は斜めに落ちてしまうと見ると、ついには自分でナイフのように飛びかかってくるのさ。それに当たればやられるし、当たらなくても、どっちみちやられるがね。ただし、奴も同時に死ぬ。フアフィアラというのさ、そいつは。誰かと一緒に二人で出かけていった友だちは、とうとう帰らなかつたね」

こんな話をしながら、親父は水車に背を凭せ掛けて、長い脚を伸ばした。

ジャンヌは聞いてなかつた。ルナール女将は、ときおり台所から出てきて何か言つては、気に入ってもらえないかと心配そうな顔をするのだったが、その日は愚痴をこぼした。かつての墓地が見捨てられたからだつた。「おまけに、墓石の半分がなくなつちやつたのよ」。言いすぎたことを恐れて、こうつけ加えて取りなした。「つまり、道理をわきまえてないひとが何人かいるつてことね」。そして台所に戻つた。それは一番暗い部屋だつた。

そもそも、ここ的小屋には水車がなかつた。「マルティニークから帰つたとき、先代の粉屋が言ったことがあつたよ。水車を一度見たことがあつたが、それは虫にすっかり食われてしまつていたとね」。こうした水車のない粉屋はどこかの工場に働きに行くのである。

「なんと腕をしてるの！」とモリスは言つて、抓つかつたものだ。

「男の子のでき損ないよ」とジャンヌが応えて言う。そして、「知恵の歯〔*dent de sagesse*〕」が出てきて、痛いよ。金槌で打たれてるみたい。昨日は頬が焼けるようで、もう堪らなかつたわ」

「という、以前は知恵がなかったのかい？」

彼女が心ここにあらずといった様子をするので、ぼくらはどうしたらよいか分からなくなってしま
う。そんなに言うつもりはなかったのだが。

朝、彼女は独りだった。それに女中のような格好をしていた。コーヒを淹れてくれた。モーリスとぼくは、代わるがわる、走者が水溜りのしかるべきところに跳んでいるかどうか見張りに行った。ジャンヌはほとんどの外に出なかった、台所に立つためだけの身繕いだったから。走者たちは、疲れた男のように、感情をあまり表に出さなかった。十番以降は、水のことや走る距離が長すぎることで文句をいう者、さらには水車を見つめだす者もいた。十七番目は妙なところから出てきた。モーリスがそいつを問いつめている間、ジャンヌがぼくを納屋に案内してくれた。

長椅子のあるこの山車は昔の結婚式に使われたにちがいない。撥ね上げられたその肘掛けは、車輪が地面についているというのに屋根瓦まで届いていた。屋根の梁は馬の腹ぐらい太い。上の床には、乾いた莢入りの隠元豆と鳩の糞ばかりがあった。それからたくさんの稜まぐさ。屋根から洩れる陽が蜘蛛の巣を通して射している。ぼくがジャンヌとは別の何かに目を移すと、すぐ彼女はこちらに寄り添ってくる。体がぶつかる。

「もちろんそうさ、知ってるよ、きみの方が強いことぐらい」。実際、彼女は腕の力だけでぼくを押すのだ。

（鳩の糞かと思ったのは、じつはたくさんの木の屑だった。天井であの妙な音を立てている虫の仕業だった。）

午後、ふたたび通りかかったとき、草を干していたジャンヌが顔を上げて、ぼくに微笑みかけようとした。が、眩しくて、しかめっ面にしかならないのだった。

雌鳥に餌を与えているルナル女将は、相変わらず間近に座って、長い間隔をおきながら一握りずつ小麦の粒を蒔いていた。

「どうして一度にやらないのさ？」

「喧嘩するのよ。そうするとなくなってしまう粒がでてくるでしょ。それに、まだ若い鳥だから」

女将は言い訳をするのが好きだ。そういえば、ぼくは今日一日で四度も粉挽き小屋に行ったことになる。そんなに長い道のりを歩いたのかと思うと、妙な気分だ。そして、そのことを考えると自分の影が見える思いがする。

一度目は、モリスと一緒にだったが、ジャンヌは納屋に案内してくれた。二度目は草を干していた。三度目は親父が何人かの兵士を前にお喋りをしていた。そして、夕方は、本当にあまりに人が多すぎた。ジャンヌは、胸のところ長いポケットが二つ付いた、壁掛けの色をしたブラウスを着ていた。あの元百姓が、偉大な演説家はトルストイ、ウィリアム二世、法王そしてジョレスだ、などと話をしていた。——ほらねえ、ジョレスはたかが四番目じゃないか、と誰かが言った。

タバコの箱を一つ、ルナル親父に置いてきた。そして別の小路からまた登ったのだった。これほど何度も訪ねたのは別に楽しいからなのではない。そうではなくて、むしろ欲望が湧いてくるのを期待したからだ。

水車の部屋からは、窓の高さのところを大量の水が流れるのが見えた。それで、その様子を一瞬見

てしまふと、自分から飛び出して水を割つて進んでいるような、そんな気がするのだつた。「でもわたし、一度も旅行したことないの」とジャンヌが言った。

もう一つの窓は柴の束で塞がれていた。入ってくる陽射しは、強いけれども少しの間で、花冠の中に見られる光のように、眩しくはあつたが十分ではなかつた。「あらっ！ あの娘が見てるわ」とジャンヌが言う。（それで、これから接吻できるかもしれないというときに身を離してしまふ。）事実、外に出るとすぐに「ジャンヌ！」と、その娘が呼ぶ。

台所から聞こえてくる眩き声は、おそらくルナル女将が独りごちているのだ。ジャンヌが夢物語の本を開けようと身を屈めたとき、ブラウスの端から乳房が覗いた。

ジャンヌのあのなおざりな様子を見てみると、ぼくの欲望は、失せるのではなくむしろ昂まってくる。裸の姿がたやすく想像できるというほどではない。しかし、服装がだらしない女はあまり抵抗しないことが期待できるのだ。

気に入つたからではなく、逆に、少し軽蔑できるからこそ、それだけその女が欲しくなるというのは、妙なものだ。男は、獣のように身内に湧きでてくる本能と絶えず闘わねばならないとよく言う。しかしぼくは、そのような本能に出逢うことは稀だ。したがって、それにもとづく道徳は、どんなに一般的であろうと、ぼくにはまず当てはまらない。ぼくの場合はむしろ逆なのだ。

しかしながら、ぼくはこれまで一度もその逆の道徳を書き記したことがない。そのことを誰に伝えたいのかあまりよく分からないからだ。そもそも、あらゆる点で普通の道徳と対立しているの

あつてみれば、それは慎みがなく、表面的には不道德なものでしかないことは明らかだ。しかし、ずれ正常になつて行くものだ。ぼくのいう正常とは、道徳的にも不道德的にも、そのどちらにも任意になれるという意味だ。ぼくの道徳的な生活はまだ始まつていなかったのだろうか。その気配がまつたくなかつたことは告白せねばならない。それに、その助けとなつてくれるものも何もなかつた。当然感じるはずの快樂を感じなかつたのだ。というのも、あるときは、その行為は自惚れ以上のものを与えてくれるにはあまりに早く終つてしまつたからだ。

またあるときは、逆に、あまりにも長く続いて、最初は猶予が与えられた喜びを利用して頑張つた様々な体位を試したりするのだが——要するに、学んでみるのだが——、そのうち疲れて、えせ羞恥心から立ち去らないでいるという有様だ。正直に言うが、それはえせ羞恥心なのだ。それに相手を失望させまいとする氣遣い。相手は、ぼくを追い払うどころか、逆にさらにきつく抱きしめるのだ。それゆえ、純粹に肉体的な快樂が次第に心の優しさという快樂に取つて代わられてしまうのだつた。ついに終つて、脇に身をどけたときには、甘美な疲労感のひとときがきた。ああ！ それは、努力や倦怠、固執などその他のすべてのものに十分値した。

ぼくはとりわけ軽い嫉妬を感じていた。不安になり、ジャンヌは次の日の一日を何をして過ごすのだろうかと自問していた。(あたかも彼女がそれまで生きてこなかつたかのように！)「わたしの髪は垂れ下がるのよ」とのジャンヌの言葉を受けて、「おれのも垂れ下がるよ」と応じたランベールは何と間違かたがであつたことか。

こうした出来事がたちまち纏つた優雅さはいえば、それは、故意のものだったのであり、ぼくの

少なからぬ迷い、あるいはおそらく不安を隠すのに役立った。しかし、隠そうとするには及ばなかったのだ。——まさにそれゆえにうまく思い出せないのだ。今やもう、思い出そうという気にもならない。

II 納屋の訪問

かなりの間、干し草の上で乾いたペンキ壺のとなりに横になっていた。階下でジャンヌの叫ぶ声があったので起き上がって、窓辺に寄った。(今朝は納屋にいと昨日彼女に言うだけの時間があつただ。)

「今日は向こうで干さないの？」遠くの方の釣り人に向かって言っている。男は返事をするが、ジャンヌは熊手ごと腕を高く挙げて、「聞こえないわ」。微笑みが止むとかなりきつい表情になる。

彼女を眺めるのは心地よい。大きな動作で干し草を広げるブロードのあの力強い娘を知らないと思してみる。ときに彼女は干し草を熊手の歯に掛けて山ごと日向に持って行き、空中で揺する。と、パツと雲ができる。

いま玄関をくぐって入った。燕が数羽、円屋根にしがみついたり離れたり、蝙蝠のように飛び回っ